

昨年十月一日の大学校舎の落成式の日、式の始まる前に、学長室を覗いたら一人でパンを食べて居られたから、「先生、今日は嬉しいでしょう。」と申上げたら、先生は病中で延び放題にヒゲをはやしてギリシヤの哲学者の様な顔でニッコリと、「有難う。斯んな嬉しいことはない、モウいつ死んでもいい。」と言って心から喜んで居られたがその横顔は何とも申上げ様のない寂しさであった。その後二ヶ月で遷化の報に接した。私の脳裏にはあの落成式の日先生の笑顔が浮ぶ、今も私はあらためて心から増円妙道をお祈りした。

弔 辞

宗務総長 片 山 日 幹

身延山短期大学々頭権大僧正松木本興上人の霊前に白す。

上人は身延町に生れ、幼きより出藍の誉れありて仏縁深く、三歳にして出家して夙に僧儀を習い、祖山学院高等部本科を卒業の後、内地留学を命ぜられて天台宗大学を卒業、それより直ちに祖山学院に教鞭を執り、前後実に四十六年、先年推されて学頭となり今日に及ぶ。

また身延山に職を奉じ、教学部長及び布教部長として令名を全国に馳す。初め中巨摩妙法寺に住し、後転じて現在の市川大門長生寺に晋董し、徳望学殖の帰する所、推されて宗務所長、布教研修所長等となり、更にまた民生委員、

児童委員、教育委員等として随所に功績を収めていよくその声誉を高む。人と為り温良恭謙、諸人その人格を称せざるなし。惜いかな昨年微恙を感じ、旧冬泊然として遷化せらる。世寿七十有一。寔に痛惜に堪えざるなり。

乃ち本日、学園葬の礼を以て本葬儀を修するに方り、宗門の名を以て一炷の香を供へ、謹んで弔意を表す。冀くは上人之を享けよ。

昭和四十三年三月三日学園葬の砌り。

松木本興先生を偲ぶ

立正大学長 坂 本 日 深

松木先生と私との出会いは、昭和十六年、祖山学院が身延山専門学校に昇格して、仏教概論を講ずるために、招かれて登山した時から始まったように思う。

初代校長は身延山法主望月日謙猊下であり、現在の日蓮宗総長片山日幹猊下は、その時教頭職におられた。当時の外来講師の筆頭は京都大学教授本田義英博士で、玉屋旅館に陣取って、そこから講義のため毎日登って来られた。博士は仲々の左利きで、朝から一杯機嫌で滔々と名講義をぶたれた。学生全員出席したことは勿論であるが、先生達も講筵に侍べることを許されたので、私も聴講の恩恵にあづかった。その際、たまたま妙法蓮華経の解釈がなされ「妙